

濱崎留衣退団記念興行
クロックアップ・サイリックス第十一回公演上演台本

キヤトル・トロワ・セゾン

〜4人の王と3つの季節の物語〜

作・演出／川原 武浩

出演王様と従者

王様王

濱崎

留衣

買取王

中島

信和

我慢王

森久

智江

新人王

上瀧

昭吾

従者

大竹

謙作

従者の従者

長岡

暢陵

スタッフ

音響

青井

美貴

照明

西本

正明

装置

兄弟

船

0 冬

三日月の、弱々しい月明かり。
冬の冷たい空気があたりを包んでいる。
それは、凡庸な冬の夜の風景である。
やがて、月は雲間に隠れ、あたりはほんの一瞬だけ闇に包まれる。
風に雲が流れ、溶明。
木々の陰には、一人の王（王様王）の姿がある。
堂々たる絢爛豪華な装いに、まばゆいばかりに煌めきを放つ王冠。
そして、その容姿には不似合いな鍬を手に。
王は、剣を抜くかのように、その鍬を上段にゆっくりと振りかぶり、凍り
付いた大地に振り下ろす。
鍬と地面のぶつかる「カキーン」という冷たい音だけが辺りに響く。
王、何かの気配にその手を止める。
その振り返った視線の先には、数人の人影。

人 1 (大きく)・・・何を？。

王様王、視線を大地へと戻し、再び鍬を振り下ろす。

人 1 麦・・・ですか？
人 2 豆・・・ですか？
人 3 それとも、米を？
王様王
人 1 麦でしょう。
人 2 米は無理だろうし、麦というにはもう遅い。
人 3 豆にしては早すぎる。
人 1 アワじゃあ間尺に合わないし。
人 2 ヒエすら育つか怪しいな。
人 3 だからって花なんて時代でも
人々何を？
王様王 墓を。

王様王、もう一度大地に鍬を振り下ろす。
そして、静かに振り返り・・・

王様王 墓と、その吊いの花を。

静かな間。

人 1

・・・お悔やみを。

王、静かにその礼に応える。

次の瞬間、王は地面を睨みすえたかと思うと、渾身の力で鍬を振り下ろす。「ザクリ」と鍬が地面に食い込む音が、あたり一面に響く。

王様王

・・・春になれば。

人々

・・・。

王様王

春になれば、この凍てついた大地も、やがてはその何者をも突き放すような頑なさを捨て、秋への希望の苗床となるだろう。頑なに、全てを寄せ付けぬ。まるで傷ついた野の獣のようだ。春の日差しは、その傷を癒すように、あたたく大地を包み、やわらかな目覚めへと導くだろう。

春には種も蒔けるだろう。夏ともなれば、緑豊かに眼に眩しく、やがて秋。実りの秋を目の前にして、我々はまた争い、豊かな実りは踏み荒らされ、そして冬。そしてまたこの大地は凍てつき、春。春、夏、そして冬。・・・春、夏、そして冬。

吊いを。誰の手にも刈り取られぬまま枯れ朽ちた、誇り高くも悲しい秋の。

音楽。

人 2

イングラント王、ジョン・プランタジネット陛下でいらつしやいますな。

王様王

・・・いかにも。

人影、無言のまま一斉に王に斬りかかる。

王様王、その太刀筋を、その手の鍬でしっかりと受け止める。

全てが停止する。

と、土の中から従者が顔を出す。

従者、停止した時間の中、易々と追っ手を倒していく。

従者、王様王を玉座に据え、満足そうに肯く。

1 春

玉座に深く腰掛け、目を閉じた王様王。
その側に従者。

従者

陛下。

王様王、無反応。

どうも座ったまま眠っているらしい。

従者

(耳元で) へ・い・か。

王様王

(カッと目を開けて) 起きておる。

従者

失礼ながら、眠っていらっしやったのでは。

王様王

寝てない。目を閉じていただけだ。

従者

春眠暁を覚えずといえますし。

王様王

黙想だ。

従者

なにかスピースピーと寝息のようなものが聞こえましたのですが。

王様王

腹式呼吸だ。

従者

は？

王様王

健康法だ。目を閉じて、寝息のように息をすると体にいいらしい。

従者

平日昼の午後は〇〇おもしろいっけりみのもんた情報ですか。

王様王

日曜夜の発掘あるある堺正章情報だ。お前もやるといい。

従者

目を閉じて、腹式呼吸ですか。

従者、目を閉じるが、薄目+白目でとても変な顔。

王様王

どうでもいいが、お前のその顔はどうにかならんのか。

従者

どうにかといわれましても。私、目玉が大きすぎるのか、瞼が全部閉まらな

いのです。

従者、変な息。

従者

(日替わり) コーホー、コーホー。

王様王

どうだ？

従者

陛下、これは何に効くのでしょうか。

王様王

えーと、薄毛と肥満と不能だな。

従者

ほほう。言われてみれば、なにか発毛力が促進されているような。

王様王

ふんふん。

従者

腹部の体脂肪が燃焼しているような

王様王 ほうほう。
従者 体の一部の血流が増しているような
王様王 あらあら。
従者 そんな気がまったくしませんが。
王様王 そうか。じゃあお前には向いていないんだな、きっと。
従者 そのようで。
王様王 水を持ってきてくれ。
従者 寝起きは喉が渴きますからな。
王様王 寝てない。
従者 かしこまりました、陛下。

従者、水を取りに行く。
従者、水をお盆に載せて戻ってくる。
と、突然ガラスの割れる音。

従者 すわ！ 敵襲か！？

従者、お盆を置いて這うように窓際へ。
と、その隙に物陰から買取王が現れ、コップの水を飲み干す。
買取王、姿を消す。
従者、恐る恐る窓の外の様子をうかがう。

従者 ……誰もいない。

と、ボールが一個足元に転がっている。
従者、拾い上げて

従者 これか？ しかしどこから？ まさか城壁の外から？ だとしたらすごい肩
だな。誰が？

従者、ボールの匂いを嗅いで…

従者 (日替わり) ベスト電器の匂いがする。城島？ まあいいか。

従者、お盆をもって王様王のところへ。

従者 お待たせしました、陛下。
王様王 うむ。

従者 (渡そうとして中身がカラなのに気づいた) えーと、コップです。
王様王 中身は。

従者 はい、只今。

従者、あわてて再度水を汲みに行く。
従者、水を持って戻ってくる。
と、またもやガラスの割れる音。

従者 !

従者、お盆を置いて這うように窓際へ。
と、その隙に物陰から買取王が現れ、コップの水を朝顔の鉢にやる。
買取王、姿を消す。
従者、恐る恐る窓の外の様子をうかがう。

従者 ……誰もいない。

と、ボールが一個足元に転がっている。
従者、ボールを拾い上げて臭いを嗅いで…

従者 (日替わり) 運河の匂いがする。ズレータ? まあいいか。
王様王 まだか?
従者 はい、只今。

従者 従者、お盆をもって王様王のところへ。
王様王 お待たせしました、陛下。
従者 うむ。
王様王 (渡そうとして中身がカラなのに気づいた) えーと、またしてもコップです。
だから中身は。

従者 従者、コップの底が抜けていないか確認。
王様王 種も仕掛けもないただのコップです。
従者 手品か? 出るのか、水が?
王様王 いいえ、消えたんです。水が。
従者 何を言つとるんだ。
とにかく、今すぐお持ちします。もう少々お待ちを。

従者 と、その隙に買取王が床にゴミを散乱させる。
なんだこりゃ。

従者、コップを置いてゴミ拾い。
買取王、その隙にコップをかつぱらい去る。

従者 あれ？ ない。ない！ 陛下〜！

王様王 なんだ。

従者 水だけじゃなくて、コップも消えました。

王様王 手品をやるんなら、せめて目の前でやってくれんか。

従者 はい、いいえ、ああ、もう！

従者、再度水を取りに行き、ペットボトル入りの水を持って戻ってくる。
と、呼び出しのベルの音。

従者 ああ、もう！

しつこく呼び出しベルの音。

従者 はいはいはい！

従者、ペットボトルを置いて応対に出る。
と、その隙に物陰からシャンプーをしながら買取王が現れ、ペットボトルの水で頭を濯ぐ。

従者、戻ってきて…

従者 誰もいない。悪戯か。

王様王 おーい、まだか。

従者、ペットボトルを引つ掴んで王様王のところへ急行。

従者 はいはいはい、おまたせしました。（空なのに気づいた）空のペットボトルで
ございます。くそっ！！ シット！！

従者、ものすごい勢いで水を汲みに行く。

従者、血迷って掃除用バケツに水を汲んでくる。

従者 大変お待たせしました陛下。水でございます。

王様王 ……水だな。

従者 はい。水でございます。

王様王、雑巾を絞って従者の顔を拭き掃除。

王様王 「飲料水」を持ってきてくれ。簡単に言うと飲める水だ。

従者 自信がありません。

王様王 何を言っとるんだ。

従者 水を持ってこれる自信がありません。才能ないんです、きつと。

王様王 水ひとつ持つてくるのに、自信とか才能とか関係ないだろう。

従者 いえ、自分は駄目な人間です。陛下のお望みひとつ叶えられない、駄目な人間なのです。

王様王 まあ落ち着け。

従者、その場でバケツの水で顔を洗って泣き崩れる。

従者 (泣き声) よよよよ。

王様王 どうした。いったいお前の中で何が起こっとるんだ。

従者 いやどうもこうも。水は無くなるわ、ガラスは割れるわ、ボールは城島だわ、ベルはチンチンなるわ、出てみりゃ誰もいないわで、私どうすればいいんでしょうか。

王様王 意味が全然わからんのだが。

従者、どこからか「バカ」と書かれた三角帽子を持ってきて被る。
両手にバケツを持って…

従者 反省します。陛下からお許しがでるまで廊下に立っております。

王様王 もういいから、水を持ってきてくれ。

従者 まだ許されるには、充分な罰を受けておりません。なにとぞ私めを厳しく罰してください。そうだ。ぶって、ぶってください。

王様王 (嫌々ぶつ) こうか。

従者 違う、パーじゃなくてグーで。

王様王 (嫌々ぶつ) こうか。

従者 もういつそチヨキで。

王様王 (目を突く) こうか。

従者 ダブルチヨキで。

王様王 (鼻の穴を引っ張りながら目をつく) こうしてこうか。

従者 お気持ちは静まりましたか。

王様王 静まるも何も、もともとぜんぜん昂ぶってないんだが。

従者 それでは、お許しいただけるのです？

王様王 ああ、許す。

従者 ありがたき幸せ。

王様王 それではもう一度改めて。「水を持ってきてくれ。飲めるやつだぞ」
自信はありませんが、最大限前向きに善処いたします。

従者

従者、水を求めて再び旅立つ。

従者

ない。買い置きしておいた水が無い。買いに行くか？ 行って帰って1時間。駄目だ。：こういうときは、そうだ、注文だ。デリバリーだ。もしもし、三河屋さん？ 三平さんいる？ 何？山形の実家に帰った？ じゃあ、サブちゃんいる？ 何？青森の実家に帰った？ どうして東北出身者ばかり雇用してるんだお前の店は。田植えと稲刈りの時期に帰省しちゃうだろ。さくらんぼとりんごの収穫でも帰省しちゃうだろ。(意味不明な悪口)イタコ！なまはげ！座敷童子！！人間将棋！！どうすんだ、そんなんで。：そうだ、主人、お前持って来い。一度も登場したことが無い、ミステリアスな三河屋の店主！陛下もきつとお喜びになるに違いない。何、これない？ 店番がいらない？ お客様がきた？ お前、お客と陛下とどっちが：(切られた)もしもし、もしもし？

買取王

おい。

従者

ああ、これはこれは陛下。

買取王

売ってやろうか。

従者

何をでございますか？

買取王

(ミネラルウォーターのペットボトルを取り出して)これ。要るんだろ？

従者

ええ、まあ。

買取王

いいぞ、売る売る。

従者

参考までに、いかほどでしょうか。

買取王

そうだな。500ディナール。

従者

高っ！ それ、業務スーパーで88円：じゃない、88ディナールのやつでしょ。エビアンとかボルヴィックとかならまだしも。いや、それでも高い。ぼったくりだ！

買取王

失礼な。売ってやらんぞ。

従者

要りません。

買取王

そうか。(朝顔の鉢に水をドボドボやる)

従者

あ、あ、あ、やっぱり要ります。

買取王

600ディナール。

従者

値上げですか。中身が減ったのに。

買取王

希少性が上がったんだよ。したがって、値は上がる。当然だろ。

従者

もう少し負かりませんか。

買取王

700ディナール。

従者

だから、なんで上がるんですか！

買取王

インフレ。

従者

意味がわかりません。

買取王

1100ディナール。

従者

だから何で。

買取王
ハイパーインフレ。
まったくわかりません。

従者
買取王
ハイパーインフレっていうのは、すごいインフレのことで、ドイツの喫茶店でコーヒー飲んでたら、お勘定見てあらビックリってやつだ。知ってます、そんなこと。わからないのは、どうして意味も無いのにこんなに短時間で値段が吊り上がるのかってことです。

買取王
じゃあ1000ディナール。
何で。

従者
ちよつとデフレ。買い時じゃない？

買取王
わかりました。買います。

従者
じゃあ、1070ディナール。

買取王
だからどうして。

従者
消費税。

買取王
先取りして勝手に7%にしないでください。

従者
善は急げ。

買取王
その格言、この場にまったく合ってません。

従者
おい、まだか！

買取王
はい、ただいま！

従者、渋々高額なミネラルウォーターを購入。

買取王
じゃあ、1100ディナールから。

従者
はい、毎度。

買取王、水を従者に渡して、そのまま去ろうとする。

従者
あの。

買取王
ん？

従者
お釣りを。30ディナール。

買取王
ああ、そうだったそうだった。じゃあ、おつり30ディナール…

買取王、わざとらしくお釣りを探す。

買取王
えーと、ちよつと待って。あれ？

王様王
おーい、何をやっとするんだ！

従者
あああ、もう！

従者、お釣りを受け取らずに大急ぎで王様王の所へ。

従者
お待たせしました、陛下。

王様王 お前は、なんというか、まあいい。
従者 (ペットボトルのまま) 水でございませす、陛下。
王様王 ラッパか。

従者 陛下、御目は大丈夫でしょうか。これはラッパではなく、水でございませす。
王様王 そんなことはわかっておる。私に水をラッパで飲めというのか。
従者 水をラッパで飲むって、そんなことが可能なのでしょうか。私、音楽美術には疎いゆえ、もしかするとそのような使用方法があるやもしれませんが。…裏

王様王 技ですか。なんかラッパのボタンみたいなところを一定の法則で押すと、ストローにモードチェンジするのですか。
従者 ラッパ飲みしろというのかという意味だ。
王様王 はい？

従者 グラスはないのかと言っとるんだ。
王様王 ああ、ああ！ そのラッパで。いや私としたことが、
従者 お前は、なんというか、本当に…
王様王 お前は、すぐに持つてまいります。

と、不運にもそこにオレンジジュース(グラス入り)を持った我慢王が通りかかる。

我慢王 ♪
従者 失礼します！

従者、すれ違いざまに当て身。

我慢王 げぼっ！

我慢王、失神。

従者、ジュースを一気に飲み干しグラスを空にする。
そこに水を満たして…

従者 お待たせいたしました、陛下。
王様王 (口を付けようとして、匂いに気がついた) オレンジのフレーバーか、気が利くな。

従者 いえいえ。
王様王 (飲んで吐いて) ぶあー。

従者 陛下、どうかなさいましたか。…まさか毒が！
王様王 ぬるい。なんというか、人肌ほどのぬるさで、絶妙に気持ち悪い。

従者 あー、その、陛下の喉が冷たくないようにと、先刻よりこの胸で暖めておりました故。
王様王 秀吉かお前は。

従者 (照れて) いえいえそんな滅相も無い。それでは明日からサルと呼んでください。
王様王 褒めてるんじゃない！ お前は、なんとというか、本当に、才能が…もう、バカっ！ ダブルバカ！！ トリプルアキセルバカッ！！ もういい、下がれ！！！！
従者 ははあっ！

従者、とぼとぼと下がる。
と、そこに買取王が現れる。

買取王 買い取ろうか、それ。
従者 え？
買取王 いらぬんだろ、それ。是非、お売りください。
従者 参考までに、いかほどでしょうか。
買取王 そうだな。10ダイナール。
従者 安っ！ もともと1070ダイナールもしたのに。これじゃ買取というより買い叩きですよ。
買取王 安く仕入れて高く売る。これが即ち商いでんがな。
従者 なんか語尾かわってるし。
買取王 良心的なほうだと思いがなあ。だいたい、他人の飲みかけのペットボトルなんて、買い取らないぞ、普通。
従者 まあ、そうでしょうけど。
買取王 よし、清水の舞台から飛び降りたつもりで特別キャンペーン買取価格、11ダイナールでどうぞだ。
従者 陛下の清水の舞台は高さ何センチですか。

買取王、じつと従者の靴のあたりを見ている。

従者 何か？
買取王 ……
従者 何を見ていらつしやるので。
買取王 足元を見てるんだよ。(自分ウケ) プププ。
従者 ……
買取王 どうなんだ、売るのが売らないのか。はやくしないとキャンペーンが終了するぞ。
従者 「ジャイアンを殺して僕も死ぬ」と言ったのび太くんの気持ちだが、今ならよくわかる気がします。
買取王 キャンペーン終了まで、5秒、4、
従者 ああああ。
買取王 3、2、1、0

従者 わかりましたよ、売ります、売ります。
買取王 はい、毎度！

従者、ペットボトルを買取王に渡す。

買取王 えーと、あれ？

買取王、ジリジリと距離を開いて：

買取王 すまんすまん。今、細かいのがないみたいだ。

買取王、脱兎のごとく逃げ出す。

買取王 また今度！

従者 ちよ、ちよ、ちよっと。あ、そうだ！ 思い出した、お釣り！ お釣りもまだ貰ってない。30デイナー！ 合わせて41デイナー！！

買取王、戻ってきて。

買取王 あ、それからさつきゼロまで数えて、キャンペーン終了したから、買取価格10デイナーね。

従者 せこい、せこすぎる。

買取王、再度逃走。

我慢王 (うめき声) うーん。

我慢王、目を覚ます。

従者、あわてて我慢王の傍へ。

従者 お目覚めですか、陛下。よかった！ 心配いたしましたぞ。

我慢王 (従者に) ねえ、僕、どうしてたの？

従者 いやあ、驚きました。すれ違いざまに、突然気をお失いになってこう床にバツタリと。

我慢王 なんか、おなかが痛いんだけど。

従者 何か拾って食べましたか？

我慢王 いや、そういう痛みじゃなくて、なんか殴られたみたいな。

従者 気のせいでしょうか。断然気のせいです。ラッパのマークの正露丸を差し上げましょうか。それともバファリン、はたまたサロンパス？ やもすると樋屋奇応丸？ ああ、もうとりあえず全部あげときましょう。どれか効

我慢王 きます、きつと。
いや、いいよ。たいした痛みじゃないし。
倒れたときにどこかにぶつけられたのではありませんか？
我慢王 そうか。そうかもね。

我慢王、あたりを見回して…

我慢王 ところでさ、僕のジュース知らない？
従者 ジュース？
我慢王 オレンジジュースなんだけど。もしかしてこぼしちゃったのかな。
従者 ああ、ああ、はい、ええ、お倒れあそばした時にグラスごとパリーンと。後は私めが片付けておきました、はい。
我慢王 そう。ごめんね、面倒かけて。

と、王様王が割れたはずのグラスを持っている。

我慢王 ……ねえ、あれ。
従者 (冷や汗) 何か？
我慢王 あれ、僕のグラスによく似てるんだけど。
従者 まあ、よくある形ですからな。
我慢王 いや、オーダーメイドなんだけど。
従者 他人の空似というやつでしょう。
我慢王 でも。
従者 世の中にはそっくりなグラスが3つあるといいますし。
我慢王 欠ける場所までおんなじなんだけど。
従者 気のせいでございます、陛下。(深々と頭をたれる)
我慢王 ……そうか、そうだよね。

我慢王、何か皮袋のようなものを取り出すと、後ろ向きになって息を吹き込む。

我慢王 (底抜けに明るく) じゃあ、僕、もう行くから。

我慢王、明るくどこかへと去る。

従者 ふう、あぶないところだった。

と、またしてもガラスの割れる音。

従者 またか！ 今度は誰だ。(日替わり) 小久保か。井口か。それとも秋山コーチ

か！

と、そこには新人王の姿。

従者 えーと、あなたさまは？

新人王、「新人王」と書かれた巨大な名刺を差し出す。

従者 新人王様で。

(首を横に振る)

新人王 ああ、なるほど。道理でお見かけしない方だなと。

従者 まあいいか、それで。

新人王 なにがでございますか。

従者 いいよ、面倒くさいし。

新人王 なんだかわかりませんが、よろしくお願いいたします。私、こちらで侍従を務めております、ヒューバート・ド・バーグと申します。どうぞお見知りおきを。

よろぴこ。

新人王 よろ…え、なんですか。

従者 いいよ、聞き流して。

新人王 かしこまりました。ところで。

従者 なに？

大変恐れ入りますが陛下、遠投だかバッティングだかわかりませんが、そういったものはできれば反対のほうを向いてやっていただけだと大変ありがたいのですが。ご覧ください、ほら、この通り。

新人王 いや、それ、俺じゃないし。

従者 ご謙遜を。

新人王 っていうか、道具持ってないし。

従者 え、さようでございますか。

新人王 っていうか、そんな体力ないし。

従者 新人王なのに？

新人王 っていうか、そんな気力ないし。

従者 新人王なのに？

新人王 (舌打ち)

従者 新人王なのに？

新人王 うわあ、もう、めんどくせー。

従者 新人王なのに？

新人王 なんかないー。

新人王、最近の若者のように地べたに座り込む。

従者 陛下、お座りになるのですしたらあちらへ。
新人王 運んでよ。
従者 は？
新人王 歩くのめんどくさい。
従者 またまた。陛下はご冗談がお好きだ。
新人王 いや、マジで。
従者 お疲れでいらっしやるので？
新人王 いや、フツ。ってどうか、割と調子いい感じ？

新人王、そのまま地べたに横たわる。

従者 陛下！
新人王 足いて。
従者 あらら。
新人王 腰いて。
従者 それはそれは。
新人王 うわあ、もう息するのもめんどくせー。
従者 なんとまあ。
新人王 死にてー。
従者 何をおっしゃるのですか、陛下。
王様王 ヒューバート！
従者 はい、陛下。
王様王 やっぱり水を頼む。冷たくて、飲めるやつだ。
従者 かしこまりました、陛下。

他の王様も一斉に登場。

買取王 こつちも水を。
従者 かしこまりました、陛下。
新人王 じゃ、俺も。
従者 かしこまりました、陛下。
我慢王 よかったら僕も。
従者 かしこまりました、陛下。
王様王 グラスに入れてな。
買取王 ペットボトルで。
新人王 俺、レモン添えて。
我慢王 僕、ストロー付で。
従者 かしこまりました、陛下。

従者、四人の間を走り回る。

どうせならコントレックスにしてくれ。

じゃあ、エビアン。

俺、ボルヴィック。

僕、ドラえもん。

かしこまりました、陛下！ (電話) おい、三河屋、コントレックスとエビ

アンとボルヴィックとドラえもんの冷えたやつ、大至急だ。今すぐもつて来

い。店なんか閉めとけ。いいか、今すぐだぞ！！

遅い。

申し訳ございません、陛下。

遅い。

申し訳ございません、陛下。

遅っせーな。

申し訳ございません、陛下。

できれば少し急いでもらえるといいんだけど。

申し訳ございません、陛下。

まだか。

はい、ただいま。

遅い。

のろま。

愚図。

唐変木。

役立たず

ろくでなし。

無駄飯食

寄生虫。

すねかじり。

王様たち、群れて大騒ぎ。

従者 駄目だ、もう耐えられん！！ (電話して) 0120オー (日替わり) 157
オー157。

従々者、出てくる。

従々者 ス〇ツフサービスです。

従者 派遣してくれ。時給715ディナールぐらいで、若くて安くて元気なやつ。

従々者 かしこまりました。すぐ参ります。こんにちは。

従者 ものすごい省略だな。

従々者 時給715ダイナールぐらいで、若くて安くて元気な私です。
 従者 ちよつと待っててくださいよ。時給715ダイナール。
 従々者 はい。
 従者 で、若くて
 従々者 はい。
 従者 若くて。
 従々者 はい。
 従者 若い？
 従々者 気持ちは若者には負けないつもりです。(若者ぶる) …じゃん？
 従者 あの、年齢はいくつなんですか。
 従々者 四捨五入すればまだゼロ歳です。
 従者 どの桁を四捨五入してんだよ。
 従々者 一桁目を五捨六入するとまだ40です。バリバリです。
 従者 五捨六入って、麻雀かよ。っていうか、45歳？
 従々者 どうしてそれを。
 従者 わかるよ。四捨五入だと50代になっちゃうから五捨六入なんだろう。
 従々者 おみそれしました。
 従者 で、安くて。
 従々者 はい。時給715ダイナールです。
 従者 なんか痛々しいなあ。
 従々者 お聞きになりますか？ 45歳にして時給715ダイナールな私の、波乱万
 丈な人生劇場。
 従者 いや、いいです。
 従々者 第1章。(日替わり)「貧民窟と私」
 従者 だからいいですって！
 従々者 そうですか。では、またの機会に。
 従者 で、元気？
 従々者 それはもう。(むせる)ウエツヘエツヘエツヘゲヘー。
 従者 ほらあ！

従々者、薬を飲んで…

従々者 この通り。
 従者 この通りって、ありのまま見たら、普通に元気じゃなさそうなんですけど。
 従々者 これは痛いところを。おみそれしました。
 従者 募集条件は、若くて、安くて、元気。で、実際のところ、老けてて、安くて、
 元気がない。1つしか満たしてないじゃないですか。
 大丈夫です。このとおり、気が若くて、安くて、病気じゃない。万全です。
 何も問題ない。
 従者 病気じゃないって、ものすごく後ろ向きな表現なんですけど。

従々者 病気じゃない。素晴らしいじゃありませんか。
従者 チェンジを。
従々者 はい、よろこんで！

従々者、ぴくりとも動かない。

従者 あの、だから、チェンジを。
従々者 はい、よろこんで！

従々者、微塵も動かない。

従者 えーと、別の人を派遣してください。
従々者 えええええっ！？
従者 もしかしてチェンジの意味がわかってなかった？
従々者 何故。
従者 それはこっちの台詞です。どうしてそんなにうちの仕事に拘るんですか。何故。

従々者 もう後が無いんです。
従者 そんなことないでしょ。
従々者 ハローワークに行っても、ハローという相手が見つからない。わかりますか、この物悲しさ。東に弁当作りのバイトがあれば、行って「ごめんなさい、実は女性だけしか採用ないんですよ」と断られ。西に掃除のバイトがあれば、行って「経験ないの？ じゃあ駄目だね」と断られ。北にテープおこしのバイトがあれば、だまされパソコン買わされて。南に治験のバイトがあれば、あぶなく内臓盗まれそうに。そういう人に、私はなっちゃってたんです。気がついたら。

従者 うわあ、重てえ。

従々者 お願いします。なんでもします、仕事をください。お願いします！

従者 もう、この通り、勘弁してください。(頭を下げる)

従々者 もう、この通り、なんとかお願いします(更に低く頭を下げる)

従者 勘弁してください。(土下座)

従々者 お願いします。(更に低く土下座)

従者 勘弁してください。(五体倒地で)

従々者 お願いします。(五体倒地のまま)

従者 勘弁してください。(もうなんだかわからない体勢で)

従々者 お願いします。(さらになんだかわからない体勢で)

王様王 おい、水はまだか！

従々者 はい、只今！！

従者 勝手に返事をしないでください。陛下、もうしばらくお待ちを。

従々者 水なら、ほら。

従々者、水筒を取り出して見せる。

従々者 朝昼晩と寝る前の薬用に常に持ち歩いております！

従者 一日4回って、いよいよ健康じゃないじゃないですか。

従々者 これは痛いところを。

王様王 細かいことはいいいから、とにかく水を持ってこい。

買取王 待ちきれん。

新人王 しびれが切れた。

我慢王 我慢の限界。

王様王 水！

買取王 水！

新人王 水！

我慢王 水！

王様王 マイム！

買取王 マイム！

新人王 マイム！

我慢王 マイム！

全王様 マイムベサツソン！！

従々者 どうぞ！ 水です！！

王様王 見慣れぬ顔だが？

従々者 今日からこちらにお世話になっております、名も無き市井の一市民でございます。

王様王 そうか。励めよ。

従々者 ははっ。

従者 お世話してない、っていうかチェンジなんですってば！

王様王 お前は何をガタガタ言っておるのだ。

従者 いえ、ですからね、安くて若くて元気なやつを頼んだのに：

従々者 呼ばれて飛び出てジャジャジャーンなのでございます。

王様王 (悦に入って) 愉快な奴だ。気に入った。

従者 陛下の笑いのツボがまったくわかりません。いや、笑いのツボはともかく、

このようなどこの馬の骨とも知れないような者を、お側に置くなど：

王様王 元はといえば、お前が水を持つてくるのが遅いからだろう。よっぽどお前より使えるぞ。

従者 (シヨック) 陛下！？

王様王 水を。

従々者 はい。あー、しかしコップが。これは私が口を付けてしまっておりませんもので。

王様王 手でいい手で。ここに汲んでくれ。

王様王、手で器を作る。
従々者、水を注ぐ。

王様王
従々者
魔法瓶ですから。

従者
（嫉妬気味）古っ。いまだき魔法瓶って。サーモマグとかタンブラーとか、他に言いようあるだろ。

従々者
ブランドものです。

王様王
タイガーか。

従々者
象印にございます。

王様王
（悦に入って）愉快な奴だ。気に入った。

従者
見えない。陛下の笑いのツボが。涙にかすんで全然見えない。

王様王
うまそうだ。（水を飲もうとする）

従者
（ハッと気がついた）失礼ながら、お毒見を。

従者、王様王の手から水をすすり飲む。
間。

王様王
ヒューバート!!

従者
失礼いたしました。しかし万一のことがあってはならならりるれへぶあ
っっ！とかいうことがあってはいけませんし。

王様王
お前は何か私に恨みでもあるのか。水は持ってこない。飲もうとすれば邪魔
をする。何がしたいのだ、いったい。

従者
陛下、私は、職務に忠実に従ったままで、邪魔とかそういったことでは…。

王様王
もうよい。水を。

従々者
はい、陛下。

従々者、再度王様王の手に水を注ぐ。

王様王、水を飲み干して…

王様王
うまい。生き返るようだ。

買取王
こっちにも。

従々者
どうぞ。（注ぐ）

新人王
俺も。

従々者
どうぞどうぞ。（注ぐ）

我慢王
あの、僕も

王様王
お代わり。

従々者
はいどうぞ。

買取王
もう一杯。

従々者
はいはい、どうぞ。

新人王
従々者
我慢王

こっちもね。
はいどうぞ。
あの、僕も。

従々者、大人気。

従者

馬鹿あつつつ！！

従者、その現実に耐えられず、ものすごい勢いでどこかへダツシユ。

王様王
従々者
買取王
従々者
新人王
従々者
我慢王
従々者
我慢王

お代わりのお代わり。
はいどうぞ。
最後の一杯。
はいはい、どうぞ。
こっちもね。
はいどうぞ。
あの、だから、僕も。
はいはい。あれ。なくなっちゃいました。
そんな。

我慢王、また例の袋に息を吹き込み我慢。
王様達、一息ついてそれぞれ玉座に座る。

従々者
王様達
従々者
王様王
買取王
新人王
我慢王
従々者
王様王
買取王
新人王
我慢王

あの、陛下。
なんだ？
ひとつだけ質問があるのですが、よろしいでしょうか。
言ってみよ。
大変失礼かもしれませんが、いったいどなたが陛下なのでしょう。
私だ。
(アメリカンに自分をさすジェスチャー) ミー。
俺。
僕。
私はあまり頭のできが良くないと自覚をいたしておりますが、それにしても
どうにもこの状況が理解できかねます。下々の無知とお笑いくださって結構
でございます。陛下のおっしゃることをそのまま理解いたしますと、陛下も
陛下も陛下も陛下も陛下だと。
そうだ。
その通り。
でっしょ。
だよ。

従々者 それは少々おかしくはございませんか、陛下。

王様達、聞こえないふり。

従々者 どうして王様が何人もいらっしやるのでしょうか。普通、王様というものは、一国につき一人……

王様達 わーっっっ!!!

王様達、その言葉を大声で遮りつつ、一斉に従者に飛びかかる。

王様達、従々者をまるめこんで胴上げしたりする。

王様達 (誤魔化して) ばんざーい、ばんざーい、ばんざーい!!!

王様王 おめでどう

従々者 ?

買取王 おめでどう

従々者 ??

新人王 万歳っ!

従々者 ???

我慢王 おめでどうございます。

買取王 それではお手を拝借。よー、よよよいよよよいよよよい、

王様達 あ、めでてえな。わー。

王様達、一斉に解散

誰も従々者と眼を合わせようとしな

従々者 (釈然とせずに) えーと、あの、陛下?

王様達、卑屈に振り返る。

王様王 今、お前はとても恐ろしいことを言おうとしたぞ。

王様達、一斉にうなづく。

従々者 いや、普通、王様は一国につき一人だけで……
王様達 きゃー。

王様達、顔面蒼白。

王様王 べ、べ、別に、何人いたっていいじゃないか。

従々者 あまりよろしくないと思います。

王様王 世の中には一夫多妻制の国だってあるんだ。同じ理屈で考えれば、一国に王様が何人居ても

従々者 いいとは言いがたいと思いますが。

王様王 首相と大統領が居る国だってあるだろう。

買取王 社長と会長。

新人王 天皇と親王。

我慢王 さくらと一郎。

従々者 陛下！！

王様王 まけてくれ。

従々者 そういう問題ではなくてですな。

買取王 見逃して。

従々者 だから。

新人王 見なかったことに。

従々者 あのですな。

我慢王 今回だけは。

従々者 ですから。

買取王 (賄賂を握らせて) これでなんとか。

従々者 (貫って) ありがとうございます。しかし疑問は解消されておりません。

王様王 私の国だぞ。その王たる私が言うんだ。いいといたらいい。

従々者 恐れながら陛下

王様王 わかった。じゃあ、こういうことでどうだ。全員、王の種類が違うというのは。

従々者 種類？

王様王 例えば私はクイズ王。

買取王 マンガ王。

新人王 ラーメン王。

我慢王 ペーパークラフト王。

従々者 (つぶやき) どの番組ですか、うちの国は。

王様達# テレビチャンピオ

わかった。わかりました。納得はできませんが、理解はしました。長い物に巻かれます。上意下達の心でサラリーマン精神です。我が国には種類別に王がたくさん居ます。ありえませんが、そういうことにいたしましょう。とりあえず、それはそれでいいでしょう。

：それでは、陛下におうかがい申し上げます。：一番偉い王はどなたでしょうか。

王様達、各々自分を指して。

王様王

私だ。

買取王 (アメリカンに自分をさすジェスチャー) ミー。
新人王 俺。
我慢王 僕。

一瞬の静寂。

王様達の視線が再び激しく交錯する。

王様王# 私だ。
買取王# (アメリカンに自分をさすジェスチャー) ミー。
新人王# 俺。
我慢王# 僕。

王様達、互いを牽制しながら、ジリジリと間をつめる。

王様王 (醒めた笑い) はっはっは。
買取王 はっはっはっ
新人王 クーックックックッ
我慢王 えへへへ。

王様達の距離が限りなくゼロに近付く。

従々者 あの、一番偉い王は・・・
王様王# 私だ。
買取王# (アメリカンに自分をさすジェスチャー) ミー。
新人王# 俺。
我慢王# 僕。

間。

王様達 (冷たい笑い) はっはっはっはっはっ。
王様王 (買取王の口を引っ張って) この口か。恐ろしくもずうずうしい言葉を吐いたのはこの口か。
買取王 (新人王の口を引っ張って) この口か!
新人王 (我慢王の口を引っ張って) この口か!
我慢王 痛い痛い痛い。(ひたすら我慢)

一触即発の雰囲気。
そこに汗だくの従者が駆け戻ってくる。

従者 陛下! いったい何を。おやめ下さい、陛下!! 貴様、陛下に何を!

従々者
いえ、ただ、ちょっと素朴な質問をいたしましただけで、特に何も。

王様達、「この耳か!」とか言いながらその辺りを蛇行。

従者
陛下、よろしいのです。この国には、王が種類別に沢山いらっしやるのです。そしてそれぞれが、それぞれに一番偉いのです。それでよいのです。だろ〜!

王様達、バラバラになる。

王様王
やはり、持つべきものは気心の知れた家臣だな。
従者
いえいえ。
買取王
年季が違うな。
従者
いやいや。
新人王
マジやばくね?
従者
そんなそんな。
我慢王
さすがだね。
従者
お褒めの言葉、恐悦至極に存じます。

と、春告げ鳥の声。

従者
春です。繰り返す季節と、繰り返す言葉と、それにいったい何の意味があるのか、わからないまま、もう一度同じ季節と同じ言葉を繰り返す。もう幾度目の春でしょうか。陛下。今年は、何を植えましょう。

王様達、それぞれの玉座とその領土と思しき場所に戻り…

王様王
麦を。
従者
陛下。
買取王
米を。
従者
陛下。
新人王
何も。
従者
陛下。
我慢王
豆を。
王様王
麦がいいだろう。今年の夏は暑くなりそうだ。夏の日差しさえあれば、秋には豊かな実りが約束されている。
買取王
手間はかかるが暑くなるなら米もいいだろう。同じ土地に蒔くのなら秋の実りは麦より多い。
新人王
何もいらぬ。どうせ、秋には。
我慢王
豆がよかるう。豆なら多少の暑さ寒さにもへたらず、ねばり強く夏を越え、

従者

秋には実りを差し出すだろう。
：かしこまりました、陛下。

従者、あたりを耕し始める。

王様王

ヒューバート。

従者

はい、陛下。

王様王

本当はな。花にしたいのだ。もしも、許されるのなら。

従者

存じ上げております、陛下。しかしながら、麦を。

王様王

ああ、麦を。

従者、ひたすらあたりを耕す。

従々者、その後、種を蒔いていく。

その姿はいずれ来る破綻を予感するようにどこかもの悲しい。

(シーン1終了)

2 夏

従者が辺りを耕すほどに時が流れていく。

王様王以外の全ての王はそれぞれの玉座で出番を待つ。

王様王と従者だけが残される。

王様王 どうだ、育ち具合は？

従者 上々です。

王様王 そうか。

従者 陛下の仰つたとおり、今年の夏は暑さがこたえます。雨もほどほどに降っていますし、この分でいけば、秋にはずつしりと重い実を付けるでしょう。

従々者、水桶を担いでやってくる。

従々者 水でございます。

王様王 ご苦労。

従者 このへんね。草むした後に、少し土が軟らかくなる程度にお願いします。
従々者 了解です。そいやー！

従々者、麦畑に水を撒く。

従者、中腰で草むしり。

従々者、従者のあとについて、盛大に水をまく。

従々者 ほいせー！

従者、従々者に追い立てられるように、バタバタ草むしり。

従々者 まだまだー！

従者、バテる。

従々者 ほら、早く早く！

従者 おかしいって。何で私が草むしりで、こいつが水やりなんですか、なにかが

おかしいでしょう、陛下。

王様王 不満か？

従者 上下関係でいえば、私が上、こいつが下。そうでしょ？

王様王 年でいえば、お前が下、向こうが上だろ。

従者 儒教じゃないんですから。職場は職場、年齢は年齢。その辺割り切らないと、
今時仕事にならないですよ。

王様王 わかったわかった。(従々者) 下がって良いぞ。

従々者
ははつ。

従々者、ただの椅子に座って休憩。

従者
王様王
従者
陛下！ 普通交代するところでしょ。あいつが草むしり。私が水やり。それはそれで悲しい気分になるとは思わんか？
まあ、そうかもしれないが。

従者、しぶしぶ仕事に戻る。
王様王、従者をじっと見つめている。

従者
王様王
従者
何か？
いや。
そうですか。

従者、仕事に戻る。
その後ろを等間隔を保ちながらついていく王様王。

従者
王様王
あの、何か？
いや、何でも。

従者、再び仕事に戻る。
今度は従者の視界に入るあたりをちよろちよろとする王様王。
従者と王様王、目で会話（従者「何か？」王様「何でもない」
従者、三度仕事に戻る。
王様王、仕事中の従者にちよっかいを出す。

従者
王様王
従者
王様王
従者
王様王
従者
王様王
従者
王様王
従者
陛下！
・・・あのさ。
はい。
どうかな。
何がございましょう？
・・・
麦でしたら、順調に
それは聞いた。さつき聞いた。
はあ。では？
だからさ、どう思う。
ですから何が
気のきかん奴だ。
申し訳ございません、陛下。

王様王 あー、つまり、なんだ、私のことをどう思う。

従者、唐突な質問に一瞬驚く。

従者 敬愛申し上げております、陛下。

王様王 本当に？

従者 社交辞令です。

王様王 お前、打ち首。

従者 冗談でございます。尊敬申し上げます、陛下。

王様王 本当か？

従者 お世辞です。

王様王 お前、火あぶり。

従者 冗談でございます。

王様王 三度目はないからな。

従者 正直に申し上げます、陛下。尊敬しているような卑下しているような、それでいてどこか敬愛しながらも軽蔑しているような、いわゆるひとつのそんな

感じでございます。

王様王 なんだ、そのどっちともつかないような表現は。

従者 玉虫色というやつでございます。本心を申し上げると火あぶりになりそうです。

王様王 お前、しばり首。

従者 いったい何を気にしておいでなのですか。

王様王 (本を取りだして) これだ。

従者 (受け取って) なんですか、これは。

王様王 何に見える。

従者 台本ですかね、芝居の。「ジョン王」作・ウィリアムシェイクスピア。演出・

(日替わり) 大塚ムネト

王様王 ない。シェイクスピアは(日替わり)かぶらない。

従者 いや、意外といけるかもしれませんぞ。

王様王 もしかしたら見に来てるかもわからないのに、めったな事を口にするな。

従者 大丈夫。(日替わり) 昨日見に来てたので、今日は大丈夫です。…続きをどうぞ。

王様王 ものすごい振り方だな。まあいい。…タイトルからも分かるとおおり、私が実名で登場してる。

従者 そのようすな。

王様王 お前も出てる。

従者 え、本当ですか。

王様王 もっと後ろの方だ。お前の出番は90ページ、第3幕の第2場だ。

従者 どこです？

王様王 ここ、書いてあるだろう。王ジョン、リチャード、ヒューバート登場って。

従者

あ、本当だ。

王様王

そして次は私のセリフだ。「ヒューバート、この子を頼む。リチャード、腰をあげろ、いそいでテントへ駆けつけてくれ、母上が襲撃されている、捕らわれたかも知れぬ」

従者

で、一同退場。なんてことだ、私のセリフがない。

王様王

そんなことはどうでもいい。

従者

いや、どうでもよくない。これは重要なことですよ。大変だ。なんて事だ。(急いでページをめくって) ヒューバート、ヒューバート、あ、出てきた。よかったです。ちゃんとセリフがある。「もったいないおことば、感謝します」

王様王

・・・なんてことだ、セリフが1行しかない。

王様王

「おお、我が心の友よ、感謝するのはまだ早い。いずれ感謝してもらおう日がくるだろうが、時の歩みがいかに遅くとも、おまえに好意をかける日は必ずくる。お前に話があったのだが、ま、それはよすことにしよう。このように太陽が天に輝き、この世の楽しみがいたるところに目につく誇らしげな真昼間は、あまりにも浮き浮きし、あまりにもけばけばしくて、どうも話がしにくい。もしもいま、真夜中の鐘が、その鉄の舌と真鍮の口でもって、眠たげな、巨大な夜のしじまにその音を響かせているならば、もしもいま、我々のいるところが墓場であり、おまえが教知れぬ害悪に痛めつけられているならば、あるいはもし・・・

従者

(セリフを遮って) 陛下！ 陛下！！

王様王

なんだ、人のセリフの最中に。まだ続きがあるんだよ。

従者

長すぎます。私のセリフはたった一行しかないのに。陛下ばかりペラペラと気持ちよさそうに。

王様王

しようがないだろう、書いてあるんだから。

従者

それに意味が分かりません。結局何がいたいんでしょう。いきなり「おお、我が心の友よ」って、ジャイアンですか。すると私はのび太くんなんですか。

王様王

あたらずとも遠からずだ。

従者

するとつまり、なにかよからぬことを相談されているというか、押しつけられようとしているわけなんでしょうか。

王様王

そうそう。その通り。

従者

目でピーナッツ噛めとか。

王様王

それじゃのび太くんそのものだろう。まあ続きを聞け。

「あるいはもし、憂鬱というしかめっ面の精霊が、お前の血を重くよどませており、そのために、ふだんはそいつが血管じゅうをくすぐりながら駆けめぐり、笑いという阿呆にくだらぬ冗談を言わせ、目も頬も引きつらせるといふ、俺の意にもっとも反する気分を生み出すわけだが、そういう気分にならないでいるならば、あるいはもし、お前が目を使わずに俺を見、耳を用いずに俺の言葉を聞き、舌の力を用いずに答えることができるならば、つまり想像力のみによって、目や耳や舌の助けなしに心が通じ合うものならば、そうであれば、いかに真昼間が監視の目を光らせようと、俺は胸の思いをお前の胸に

王様王 とんでもない。勝手に書いてあるんだよ、この台本に。
従者 私、殺しちゃうんですか？
王様王 いや、私は殺せつて命令したんだけど、結局お前が情けをかけて殺さないの。
従者 良かった。悪役脱出。
王様王 でもアーサーは死んじゃうんだよ。
従者 どうしてですか。
王様王 城から逃げ出そうとして城壁から飛び降りちゃうの。
従者 で、死んじゃうんですか？
王様王 「高い城壁だな、でもここから飛び降りよう。大地よ、かわいそうに思っ僕
を怪我させないでくれ」って言ってびよんと。
従者 馬鹿ですか。
王様王 馬鹿だろう。普通高いところから飛び降りたら怪我は確実、下手すりゃ死ぬ
さ。それが「高い城壁だな、でもここから飛び降りよう」びよん。これは
私の責任か？
従者 (首を横に振って) いや、それは飛び降りる方にもいくばくかの責任があるよ
うに思います。
王様王 いくばくじゃないよ、ウチの城壁20メートルもあるんだぞ。そこから飛び
降りようなんて、普通じゃ絶対考えないぞ。しかも地面は石畳だ。なにをど
うやったって無傷で下まで降りられるわけがないだろう。
従者 そりゃそうですね。でもなんで逃げ出そうとしたんですか。
王様王 そこまでの話をかいつまむとこんな感じだ。

待機中の王様達と従々者、出動。
三文芝居が始まる。

買取王 私はジョン王。
新人王 私はヒューバート。
我慢王 僕、アーサー。
従々者 私、城壁。
買取王 ヒューバート、俺はお前が好きだ。
新人王 陛下、私も陛下を愛しております。
買取王 だったらあいつ殺して。
新人王 かしこまりました陛下。坊ちゃん、悪いけど死んで
やだ。
新人王 うおりゃー、カキーン。(剣が城壁にあたる)
従々者 パラパラパラ。
新人王 カキーン。(剣が城壁にあたる)
従々者 パラパラパラ。
新人王 カキーン。(剣が城壁にあたる)
従々者 パラパラパラ。

我慢王 (追いつめられて) わー、許して。

新人王 (許す。でも秘密だよ。(買取王に) 殺してきました。

買取王 なんて殺したんだ。

新人王 だって、陛下が殺せって。

買取王 言ってない。

新人王 言った。

買取王 言ってない。

新人王 言った。

買取王 何時何分何十秒地球が何回回った時に言ったんだよ。

新人王 陛下！

その間にも「逃げなきゃ」といいながら逃げるアーサー役の我慢王と行く手を阻む城壁役の従々者の小芝居が続く。

買取王 だって、お前が駄目だって言わなかったから。

新人王 駄目って言ったら怒るでしょう。(目の前に命令書をつきだして) それにほら、命令書にもサインが。

買取王 げっ。(奪い取って食う) むしゃむしゃむしゃ。お前が勝手にやったことだ。陛下！

買取王 貴族どもが怒ってるんだ。なんで殺したんだって。お前のせいだからな。お前が全部やったんだからな。俺は殺せなんて一言も言っただけだからな。やーい、やーい人殺し。

新人王 陛下、実は殺してません。

買取王 なにっ！偉い！ 急いで怒ってる貴族どもにふれて回れ。

新人王 かしこまりました陛下。

我慢王 (城壁によじ登って) びよん。わー、ぐしゃ。

王様達と従々者、カーテンコールのように横一列に並んで一礼し、定位置に戻る。

王様王 どうだ。どう思う。悪い奴は誰だ。

従者 これは、運命のイタズラという名のご都合主義。はいっ！ 作者が悪いと思います。

王様王 そうだろう。私のせいじゃないよな。

従者 でもそれ以上に陛下も悪いと思います。何が悪いって、自分のしたことを全て私になすりつけようとする、その無責任な性格が。

王様王 なあ、私はこんな風に書かれてしまうほど評判悪いのか？

従者 ……

王様王 私は、はたからみるとこんな風なのか？

従者 えーと…

沈黙。

従者、気まずいのか、従々者に目で「お前言え」と合図。

従々者、まったく理解していないリアクション。

従者、その場の空気に耐えられなくなつて：

従者 ……正直に申し上げます。世間では陛下の事を「失地王」「欠地王」

従者、目で従々者にふる。

従々者 「無地王」

従者 「篡奪王」

従々者 「破門王」

「史上最低のイングランド王」

果ては（日替わり）「ラ王」とか

（日替わり）「スパ王」とかもう好き放題呼びならわし、嘲り笑っております。

：やっぱり。なんかおかしいと思つてたんだ。私は要するにこん平なんだよ。

そうなんだ、こん平なんだ。ちゃーぎー村に春が来た。こん平でーす！

おっしゃる意味がよくわかりませんが。

王様王 だって、2代目とか3代目とかがないじゃないか。リチャードだって、2

世とか3世とかいるのに。ヘンリーなんて8世までいるんだよ。いないじゃ

ないか、2代目・林家こん平とか。

陛下がご存命のうちに、2代目が出てくるのもただごとではないように思い

ますが。

一緒だよ。どうせ私が死んだって、ジョン2世とか、でてきやしないんだ。

わかりませんぞ。こぶ平が正蔵になる時代です。

（聞いてない）要するに認められてないんだよ。リア王と私だけ。リアはいい

よ。どうせ架空の人物でしかもボケ老人じゃないか。しかもそのおかげで有

名じゃないか。それに比べて私は何だ。ジョン。ジョンだって。だいたいこ

んなの王様の名前じゃないよ。ジョンとかペスとか犬の名前じゃないか。ポ

チとかタマとかと一緒にじゃないか。ああ、我が名はジョン。畜生やこん平と

同レベル。

そこまでご自分を貶められなくとも。

くそう、どうしてくれよう。この汚名をそそぐ何かいい方法はないか。

そうですねえ。

従々者
王様王
従者

考え込む王様王と従者と従々者。

王様王

：そうだ、処刑だ。私に対して否定的な奴を全て処刑する。

出番待ちの王様達、意志決定の場面に急ぎ出動。

買取王 金で解決する。

新人王 ウィニーで個人情報を出させろ。

我慢王 何かいいことをして、世間をみかえす。

従々者 ジョニーに改名する。

従者 あんたの意見は要らない。っていうか、この列に入るな、おそれおおい！

従々者 画数です、画数が悪いんです。間違いない。

従者 (従々者を無視して) おそれながら、処刑という方法をとりますと、我がイン

ランドの人口はよくて半分以下、ひよつとすると限りなくゼロに近くなっ

てしまうかもしれません。

従者 そんなに嫌われているのか、私は。

王様王 それから金で解決する。その金がありません。

従者 なにいつ！

買取王 毎年の戦争と長引く不景気で、国の財政は火の車でございます。それからウ

新人王 イニーですが

よくね？ キンタマウイルスでハメ取りのエロ画像とか流出したら、そいつ

死なね？

従者 回りとどい上に、遠回りしすぎです。

新人王 (ボソリ) 否定された。死にてー。

従者 何かいいことをして、世間をみかえす。これはいいように思います。

我慢王 だろ。結構いけると思うんだよ。なんせこれまでの評判が評判だからさ。ち

よつといいことしただけでも、みんなびっくりすると思うんだよ。

従者 その通りです、陛下。「あいつ、ワルだと思ってたけど、実は結構いいやつじ

ゃん」そう思わせればこっちのもんです。何かありませんか、そういう心温

まるエピソードは。

王様達、しばらく考え込み…

王様王 火あぶりを縛り首に変更してやったことならある。

王様達# (自画自賛) おー！

従者 それはあまり大差ない気が。

王様王 そうか？ 縛り首の方が、火あぶりより楽だろう。

買取王 だよな。

新人王 マジ間違いないくない？

我慢王 縛り首なら一瞬だし。

従者 まあ、そうかもしれないませんが、結局死刑じゃないですか。もつと慈悲の心が

垣間見えるような、そんなやつですよ。

王様王 ないなあ。

従者 なければそれで、これからなさればよいのです。

王様王 どうしろというんだ。
従者 イメージ戦略です。なにかいいことをして、その話を広めるのです。
王様王 例えばどんな。
従者 こういう場合には、女・子供・動物絡みのエピソードと相場が決まっています。例えば、そうですね…湖で溺れかけた子供を、偶然通りかかった陛下が助けたことにしましょう。

王様王 お、いいんじゃない。
買取王 女・子供同時ではどうだ。
従者 じゃあ、湖で溺れかけた母と子供を助けたことに。
買取王 よしよし、一挙両得。景気がいい。
新人王 女・子供を時間差でつてどうよ。
従者 じゃあ、湖で溺れかけた子供を助けてその10分後、続けざまに今度は母親を助けたことに。

新人王 よくね？ これマジよくね？
我慢王 動物はどうかな。
従者 じゃあ、湖で溺れかけた子馬を。
我慢王 基本は一緒なんだね。
従者 すみません、想像力が貧困で。
従々者 全部一緒にしてみてもはどうでしょう？

王様王 おお、なるほど。
従者 ええと、じゃあ、突然暴れ出した馬に二人乗りしていた母子が、馬もろとも湖につつこんで、そこに偶然通りかかった陛下が溺れかけていた子供と母親と馬を…なんか無理がありませんか？
従々者 ええ話や。想像しただけで涙がチョチョ切れます。
王様王 だな。
従者 いやまあ、私はどれでもかまわんですが…いかがいたしましたでしょうか。
王様王 …めんどくさいから、お前決めといてくれ。
買取王 そうだな、どれでも大差ない。
新人王 結局溺れてるところを助けるんだろ。
我慢王 違うのは誰が溺れてたのかってとこだけだよな。

王様王、立ち上がってどこかへ行こうとする。
それにつられて、他の王も動き始める。

従者 陛下、どちらへ？
王様王 疲れた。もう今日は休む。
従者 おやすみなさいませ。
買取王 そうだ、デイトレしなきゃ。
従者 頑張つて。
新人王 2ちゃんにカキコ。

従者 程々に。
我慢王 日記書かなきや。
従者 アナログですな。
従者 それでは私もこれで。
従者 あんたまで帰らない。
従者 私時給ですし。残業つきませんし。家には十を頭に7人の子供が腹をすかせ
て私の帰りを待ってまして。
従者 えらい子たくさんだな。あんたんところ。
従者 お聞きになりますか。45にして子供7人の波瀾万丈な人生劇場。
従者 いや、聞きたくない。
従者 第35章(日替わり)「売春婦と私」
従者 だからいらなんだってば。
従者 そうですか。では、またの機会に。失礼します。

従者、家路につく。

従者 あ、ちよつと…信じらんねえ。本当に帰りやがった。(ボソツと) 使えねー。
(大声で) 使えねー! やってらんねー!!

従者、叫んで気が済んだのか、少し落ち着く。

従者、執務に戻って…

従者 ふう。…さてと、陛下の美談、どれにしようか。女、子供、馬、全部。女、
子供、馬、全部。いやまてよ、馬を助けたところで、どうやってそれを証明
するんだ。まず目撃者が必要だな。それから溺れる親子はどうしよう。それ
以前に、陛下は泳げるのか? 人間はともかく、馬を助けるってのは大丈夫な
んだろうか。ポニーぐらいにしたい方がいいのかな。でもポニーに親子が
二人乗りして湖につっこむってのは、絶対に無理があるぞ。設定変えなきゃ
な。子供がポニーに乗って遊んでいたら、棘を踏んだポニーが驚いて子供も
ろとも湖に突っ込む。で、それを見ていた母親が子供を助けようとあわてて
湖に飛び込んで、泳いでいく途中で洋服が絡みついて溺れてしまう。こうだ
な。これでいいだろ。あとは偶然通りかかった陛下が、勇敢にも湖に飛び込
み、2人と1匹を助ける。…無駄かな。やっぱり子供だけでもいいような気
がするな。

従者、ふと辺りに目をやる

その視線の先にはうとうとと眠りに落ちそうな王様達の姿

従者 (ため息) ふう。あと、なにをやらなきゃいけないかつたつけ。…水争いに土
地争い、訴訟も文句も山ほど届いてるし。「ウチの家のリンゴの木が大きくな

ったので、垣根を越えて隣の庭に枝がはみ出しました。それをいいことに隣人がはみ出した枝になったリンゴの実を盗むので困ります、百叩きにしてください」ウチの隣の家のリンゴの木が垣根を越えてウチの庭まではみ出してきました。当然はみだしてきた枝になっているリンゴはウチのものだと思うのですが、隣人は私をドロボウ扱います。頭にくるので、百叩きにしてください」なんてケチくさい話だ。どっちも百叩き。．．．あ、ゴミ出しとかなきゃ。今日、ゴミの日だ。ゴミ袋、きつく縛つとかなないと、最近野良犬が食い散らかすんだよな。ぎゅーっと、きつーく。縛る。．．．縛る？縛るといえば縄。縄といえ、沖縄。めんそーれ。違、縄といえ、．．．そうだよ。ばり首だよ。忘れてた。今朝吊した奴、降ろすの忘れてた。やばいな、夏だしな。腐るの早いよな。匂うんだよな。墓堀、呼び出すか。もう寝てるかな。こんな時間に起こして、いきなり腐った死体片づけて埋めろつてもかわいそうだよな。でも、あいつそれが仕事だしな。でも22時回ってるし、25%割り増しだよな。今月分の人件費って、まだ予算残ってたつけ。ああ、ゴミ出しに行かなきゃ。いや、まあ、なんか大事なことを忘れてないか。ああああ、思い出した、今年の税率決めなきゃいけないかったんだ。今年は豊作っぽいし、少し多めに取り立てても問題ないよな。でもなあ、みんな嫌な顔するんだよな。ドロボウみたいに言われるもんなあ。やっぱり去年と同じにしとこうかな。

従者、やる気なさげに顔をあげる。

周囲には眠りこけている王様達

従者

：何で王様でもないのに、こんなこと決めなきゃいけないんだ。

間。

従者

王様でもないのに。

従者、黙考する。

静かな間。

やおら立ち上がり、そろりそろりと王様王の方へ近づく従者。

従者、王様王の王冠に手を掛けようとして：

従者

(我に返って) いかんいかん。何をしようとしてるんだ。

従者、一旦テーブルに戻る。

しかし一度浮かんだ考えは容易に振り払えない様子。

従者

いいかな。

もう一度、王様王の方へ近付く従者。

従者

仕えて仕えて疲れるばかり。私とて、この世この身に生まれつかねばと、夢見る事もございます。この夜の明けるまで結構でございます。せめて、一度だけでも。ご容赦を。

従者、王様王の王冠を外す。

無反応で眠りこける王様王。

と、買取王の目が開いている。

従者

わっ！

しかし、買取王は無反応である。
間。

買取王

(いびき) ぐー。

従者

寝てるのかな、これは。

買取王

(領きながらいびき) ぐー。

従者

寝てますよね。

買取王

(いびき) ぐー。

従者、買取王の瞼のシャッターを降ろす。

従者

ガラガラガラ、はい閉店です。

従者、買取王の王冠を外す。

従者、新人王の方へ向かう。

新人王、ナイスタイミングで寝返り。

従者、外した新人王の王冠を落としそうになる。

続いて従者は我慢王の方へ。

と、従者が我慢王の前に来た瞬間、我慢王が突然立ち上がる。

我慢王

おのれ、くせ者。曲者じゃあ、ものども、であえであえ！！

従者

わああああ、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！

我慢王

はっ、お主は、桔梗屋。

我慢王、座る。

我慢王

(寝言) ううん、新右衛門、一休どのを呼べ。

従者 なんだ、寝言か。…大人しい方だと思っていたけれど、やっぱり色々溜まってるのかな。

従者、我慢王の王冠を外す。

従者 ふう。

従者、王様王以外の王冠をそのあたりに隠す。

音楽。

従者、王様王の王冠をその頭上に戴く。

ゆっくりと振り返る従者。

従者 誰か。誰かおらぬか。

その声に、元・王様達と従々者が飛んでくる。

全員 お呼びでございましたようか、陛下。

従者 喉が渴いた。水をもってきてくれ。

王様王 かしこまりました、陛下。

従者 待て。気が変わった。ミルクティーを一杯頼む。

買取王 かしこまりました、陛下。

従者 いやまで、やはりビールだ。ぬるめのラガーを。

新人王 かしこまりました、陛下。

従者 それから、サンドイッチを。

我慢王 かしこまりました、陛下。

王様王 お待たせいたしました、陛下。

従者 水はもういらん。(従々者に) もっていけ。

従々者 かしこまりました、陛下。

買取王 お待たせいたしました、陛下。

従者 それももういい。(王様王に) もっていけ。

王様王 かしこまりました、陛下。

新人王 お待たせしました、陛下。

従者 うむ。

我慢王 お待たせしました、陛下。

従者 うむ。

従者、サンドイッチとビールを両手に満足そうな表情。

従者

(かみしめるように) いい。王様いい。やっぱり使われるより使う方が断然いい。おめでとう、自分。そんな自分に乾杯。…いただきます。(口を開ける音)

従々者　んが
従々者　お待ち下さい、陛下。
従者　なんだ。
従々者　失礼ながら、お毒味がまだでございます。

従々者、従者の手からサンドイッチとビールを取り上げる。

従々者　それでは、失礼して。

従々者、一気に全部食う。

従者　ああっ！！

従々者、一気に全部飲む。

従者　あああっ！！
従々者　(満足げに)プハー。：陛下、毒は入っておりませんでした。
従者　：お前、打ち首。

従々者、買取王と新人王に脇を固められ、隅の方へ連行される。

従者　もう一度もってこい。サンドイッチとビールだ。
王様王#　かしこまりました、陛下。
我慢王#　かしこまりました、陛下。

新人王、買取王、従々者、もどってくる。

買取王　首をはねてまいりました。
従者　ご苦労。
新人王　これはかわりの毒味役でございます。
従々者　この度は私ごときをおとり立ていただき、誠にありがとうございます。陛下の御ために誠心誠意お尽くし申し上げる所存でございます。
従者　顔が気に入らん。・・・打ち首。
従々者　陛下ーっ！

従々者、買取王と新人王に脇を固められ、隅の方へ連行される。

買取王　首をはねてまいりました。
従者　ご苦労。
新人王　これはかわりの毒味役でございます。

従々者、小細工で表情を変えている。

従々者 この度は私ごときをおとり立ていただき、誠にありがとうございました。陛

下の御ために誠心誠意お尽くし申し上げる所存でございます。

従者 うむ。しつかりと果たせ。

従々者 有り難き幸せ。

王様王# お待たせしました、陛下。

我慢王# お待たせしました、陛下。

従者 うむ。

従々者 それではさっそくですが、失礼いたします。

従々者、サンドイッチとビールをインターセプト。

従者 前もって言うておくが、全部食うなよ。

従々者 かしこまりましてございます、陛下。

従々者、ちよつぱり食う。

従々者 よし。．．．陛下、こちらの品は大丈夫でございます。

従々者、従者にサンドイッチを渡す。

つづいて従々者、ちよつぱり飲む。

従々者 よし。．．．陛下、こちらの品も大丈夫でございざせぞぞぞぞぞぞあわびゆ。

従々者、経絡秘孔の一つを突かれたように爆発する。

従者 わあ！！

王様王 (ひとなめして吐き出す)．．．毒が。

従者 毒か、あれ？

新人王 これを持ってきたのはたしか．．．

全員の視線が我慢王に集中。

我慢王 ふふふふふ、ばれてしまつては仕方がない。覚悟！！

我慢王、従者に向かって襲いかかる。

間に割つてはいる元王様達。

従々者もどさくさにまぎれて復活している。

エチュード・おしくらまんじゅう状態での大乱闘。
結果、従者以外の全員が倒れる。

従者 なんとということだ。誰か、誰かおらぬか。

その声に、全員が元通り復活。

全員 お呼びでございましょうか、陛下。

従者 わあ！

王様王 そろそろ執務にはいつていただきませんか。

従者 シツム？

王様王 お仕事でございませぬ、陛下。

従者 あ、ああ、執務ね。でもまだ食事が。

王様王 残念ですが、急いで頂きませんと、諸々の業務に支障がでますので。まずはこちらの書類にサインを。

従者 (渋々サインをして渡す) なんだ、これは。

王様王 「罪人・(日替わり) 森脇監督代行を縛り首に処す」死刑執行の命令書でございませぬ。これを担当の係へ。

王様王から買取王、新人王、我慢王、従々者へバケツリレーのように命令書が運ばれていく。

従者 わあ。そういうことは早く言え。なし、いまのなし。返せ。

王様王 駄目でございます。

従者 よくみてなかったんだよ。

王様王 駄目なものは駄目でございます。

従者 縛り首って、何したわけ、その人。

王様王 さて、私には分かりかねます。(買取王に) 詳しい内容は？

買取王 叛逆罪ときいておりますが。私にもそれ以上は。(新人王に) わかるか？

新人王 侮辱罪でございます。おそれ多くも市中で陛下に対しての讒言をふれまわったとか。詳しい内容までは存じ上げませんが。(我慢王) どうなの？

我慢王 陛下の人形を十字架に磔にして、火あぶりにしたと聞いておりますが。(従々者に) だよね。

従々者 いいえ、城壁に陛下の顔を落書きした罪でございます。

従者 全然違うじゃないか。なんでそれぐらいで死刑なんだ。

従々者 あまりに似てなかったもので。もう私、人ごとながら悔しくて悔しくて、こいつは殺さないかんバイって思うたのですよ。

従者 やっぱり取り消し。

王様王 駄目でございます、陛下。一度ご署名いただいた文書は、たとえ神であろうとそれを破ることはまかりなりません。

従者 うるさい、私は王だぞ。死刑は中止だ。
王様王 わかりました。それではこちらの書類にサインを。
従者 なんだこれは。
王様王 死刑執行取り消し命令書でございます。
従者 いちいち面倒くさいな。
王様王 決まりでございますので。

従者、サラサラとサインして王様王に渡す。

王様王 (受け取って) 確かに。

王様王から買取王、新人王、我慢王、従々者へバケツリレーのように命令書が運ばれていく。

買取王 訴状が届いておりますが。
従者 内容は？

買取王 「ウチの家のリンゴの木が大きくなったので」
従者 百叩き。

従者 かしこまりました。それではここにサインを。
はいよ。

新人王 こちらにも訴状が。
従者 読み上げろ。

新人王 「ウチの隣の家のリンゴ」
従者 百叩き。

新人王 かしこまりました。それではここにサインを。
ほれ。

従々者 (ゴミ袋をもってきて) ゴミを出してよろしいでしょうか。
従者 ゴミぐらい勝手にだしとけ。

従々者 いいえ、なりません。この城のものは、厨房の野菜クズから床につもった埃まで、全て陛下の持ち物でございます。私の一存で捨ててよいかどうか決められるものではございません。捨てていいのかどうか、どうぞ、おあらためくださいませ。

従者 わかったよ。(ざっとみて) いいよ、捨てて。
従々者 もっとじっくりと見ていただかないと。なんでしたら、こちらに全て広げましょうか。

従者 いいから捨てに行け。

従々者 かしこまりました。それではここにサインを。
(サインしながら) 捨てる時は、しっかり縛れよ。

従々者 心得ております、陛下。
買取王 陛下、今年の税の件ですが、いかがいたしましたでしょうか。昨年は直営地での労

従者 働が週2日、農民保有地からの貢納は収穫の20%でございました。今年も直営地での労働は週2日で行わせております。今年の貢納も昨年と同じでよろしいでしょうか。個人的にはもう少し引き上げても差し支えないかと存じますが。覚えやすいように労働50日、税率50%ほどではいかがかと。上げすぎだろ。

買取王
従者
買取王

ゴマと百姓は絞れば絞るほどといいます。いいよ、去年と同じで。いきなりそんなに増やしたら革命が起きるぞ。そうですか。それでは、こちらにサインを。

と、ガラス窓が割れ、巨大な石の固まりが飛び込んでくる。

従者 なんだ、どうした。またボールか！ いったい誰の仕業なんだ。

王様達、様子を見に行つて…

王様王
従者
新人王

いえ、岩です、巨大な石の固まりが。岩？
それから、このようなものが。

新人王、従者に手紙を差し出して…

新人王 岩に縄でくくりつけられておりました。

従者、開封して読む。

新人王
従者
新人王
従者

なんと？
読めん。
なんと。
何語だ、これ。誰か読める者はおらぬか。

王様達、手紙を回覧。

王様王
買取王
新人王
我慢王
従々者
従者
従々者
従者

いや、これは。
わかりませぬ。
語学には疎うございまして。
あいにくと。
ほうほう、なるほど。
読めるのか。
フランス語ですな。
意外だな。いったいどこで学んだのだ。

従々者 お聞きになりますか。私の波瀾万丈な人生劇場・第40章（日替わり）「ジダ

ンと私とマルセイユ」

従者 やっぱいいい。

従々者 そうですか。

従者 内容は。訳してくれ。

従々者 「やーいやーい、失地王。お前のかあちゃんべそ」と。

従者 お前、打ち首。

従々者 私が言ってるのではなく、そのように書いてあるので。

従者 本当だろうな。

従々者 もちろんでございます。

従者 で、誰からなんだ。

従々者 それは、書いてないようです。

と、またガラスが割れ、岩が飛び込んでくる。

従者 またか！

王様達、様子を見に行つて…

王様王 （手紙を差し出して）またしてもこのようなものが。訳せ。

従者 いえ、これは訳すまでもございません。BYフィリップ2世と書いてあります。

従者 フランス国王か！

買取王 しかし、このような大岩、かの領土からではここまで打ち込めますまい。何かのイタズラでは？

新人王 いや、しかし、この花押は間違いなくカペー家の物。

我慢王 すると、大砲、ですか。

従者 我が領内に侵入し撃つたという可能性は。

王様王 今確認をさせておりますが、只今のところ、そのような報告は入っておりません。

買取王 それでは領外から、この城にまで届くような射程の大砲を開発したということに。

従者 馬鹿な。ありえん。

新人王 いえ、花火のような要領で、火薬を使えば、まったくありえないとも言いきれませぬ。

我慢王 我が国でも研究は続けておりますが、それでもせいぜい2〜3マイルの射程。仮にカレーから打ち込まれたとすれば、射程80マイルは出ている計算になります。

従者 ……

王様王 これは由々しき事態かと。
従者 ・・・
王様王 陛下、どうなさいますか。
従者 どうって。
買取王 反撃か。
新人王 降伏か。
我慢王 籠城か。
従者 ・・・
王様王 ご決断を、陛下。
従者 様子を見る。
王様王 恐れながら、陛下。
従者 ありえぬ。これは何かのトリックに違いない。80マイルも飛ぶ大砲だと。
そんなものがこの世のどこにあるというのだ。ありえん。夢物語だ。

と、激しい衝撃。
一同、バランスを崩し、転びそうになるがなんとか踏みとどまる。
どうやら城壁に岩がぶつかったらしい。

従々者 見ました。確かに遙か南の方角から、こちらに飛んできました！！
王様王 陛下！
従者 ありえん。
買取王 陛下！
新人王 陛下！
我慢王 陛下！
従々者 陛下！
従者 ありえん！！ これは何かの間違いだ！！
王様王 陛下！！
買取王 陛下！！
新人王 陛下！！
我慢王 陛下！！
従々者 陛下！！

従者、目をつぶり、耳をふさぎ、現実から逃避する。

王様王 ・・・やれやれ。
新人王 やっぱ駄目じゃん。
買取王 これじゃあとても任せられんな。
我慢王 やりたくてやってるわけでもないからね。王様なんて。せっかくかわってく
れるっていうから、かわってあげたけど。・・・君じゃ無理だよ。

王様王、その目に威厳を取り戻す。

王様王

何かを決め、何かを断つ。全てが明らかとは限らない。いや、明らかなのほうが少ないだろう。たとえ、新月の夜、出口のわからぬ暗い森を進むのであろうとも、悠然と、自信に満ちた表情で、その暗闇を進まねばならぬ。100%の自信なぞ、本当はあるわけも無い。それでも、その孤独・恐怖、それら全て飲み込んで、笑いながら我は往こう。気狂いと呼ぶものもあるだろう。暴君と誹るものもあるだろう。それでも、己の目に見えるその場所を、そして他の誰にも見えぬその場所を目指して、敢然と歩みを進めよう。

もしかすると、そのような場所はこの世のどこにもないのかもしれない。皆が幸せに暮らせる理想郷など、どこにもありはしないのかもしれない。

王は奔放ではない。ただの奴隷に過ぎぬ。そのことを知らぬ王に、どうして国が治められようか。王を名乗り、王のように生き、王のような形（なり）で、王のように振る舞うことはお前にもできるだろう。

しかしそれでは私の兄と同じだ。自らが自らの名譽のためだけに戦場へと赴き、本国に残された領民のことなどただの一度たりともかえりみることなく、ただ自らの名譽と欲望のために生きた、民無き獅子心王と同じだ。

篡奪者と言われようが、失地王と蔑まれようが構わぬ。ただ私はこの場所で、民を守り、民と共に生きたいと思った。それだけなのだ。

王様王

（柔らかく）さあ、それをはずせ。

静かな間。

従者

・・・かしこまりました、陛下。

従者、王冠を王様王のもとへ差し出す。

それぞれの王も隠されていた王冠を探しだし、自らの頭にかぶる。

王様王

もう、秋が来る。いつものような争いの秋が・・・下がっている。ここからは私にしかできぬ仕事だ。

秋を知らせる突然のつむじ風。

その強い風に揺らぐこともなく、4人の王は、確かにそこに王として立ち続けている。

（シーン2終了）

3 秋

従々者
それでは只今より、第1回「朝まで生討論・フランスのエスプリ野郎が大砲
持って攻めてきたのでどうしよう会議」を開催いたします。

と、緊急に政策決定会合が始まる。

従々者
発言のございます方は、挙手をお願いします。

買取王、挙手。

従々者
買取王
(国会風に) 買取王くん。
どうするよ。無理だろ、勝てないぞ、あれ。

新人王、挙手。

従々者
新人王
新人王くん。
だからちげーよ。

従々者
新人王
新人王
訂正するのめんどくせえからいいけどさ。
ご意見をどうぞ。

もう、なるようになっちゃえばって感じ？ レットイットビー？

王様王、挙手。

従々者
王様王
王様王くん。
徹底抗戦だ。こちらからうって出る。あれほどの距離を出す大砲だ。おそら
く移動砲台ではなかるう。カレーからなのかそれともダンケルクあたりかは
わからぬが、ドーバーを渡り、破壊してしまえばよい。

我慢王、挙手しているが気付かれない。

従々者
我慢王
他にご意見はございませんか。

我慢王
王様王
新人王
あ、あの、僕。
(なんとなく沈滞した雰囲気) 気持ちが負けておる。気合いが足らん。
気合いだけじゃどうにもなんないっしょ。敵が大砲って最強アイテム持って
るのに、剣とか弓とかで勝てるわけないじゃん。

王様王
新人王
買取王
この現代っ子。新人類め！
(ボンツと) 旧人類。超ありえねー。
だからこないだ売っつけばよかったんだ。このまま取られたらタダだぞ、タ

王様王
ダ。欲しいっていったのを断れば、次は実力行使に出てくるのは当たり前
だろう。金だ。金で解決しよう。
この売国奴が。

と、我慢王、ようやく手を挙げているのを気付いてもらえた。

従々者
我慢王くん。

謝るってどうかな。ほら、謝っちゃえば、許してもらえるかもしれないし。

王様王
このままだと、間違いなくこの城まで攻めてきちゃうけど、今のうちなら
ブライトンとかドーバーとか、南の方をあげちゃえば、許してくれるかも…
馬鹿者！！！！

王様王、立ちくらみをおこす。

王様王
そのようなことでどうする。そうしたとして、市民は、領民はどうなる。そ
のような考えでいるから、我が国は…

王様王、急に押し黙る。

従者
陛下？

王様王
すまんが、水を一杯頼む。

従々者
かしこまりました、陛下。

従者、王様王の様子がおかしいのに気付き…

従者
陛下？

従々者
お待たせ致しました。

王様王、水を取り落とし、そのままへナへナと崩れ落ちる。

従者#
陛下！！

従々者#
陛下！！

従者
大変だ、熱が。

王様王
大事な。

従者
いいえ、大変な熱でございます。医者だ。医者を呼べ。

従々者
ああ、三河屋医院さんですか。往診お願いします。何、日曜は休み？
そこをなんとか。いるんでしょ、先生。なに？ 医師会でゴルフ旅行？ 1泊2
日で明日まで帰らない？ どうすんだ、そんなことで。え？ 何？ 日曜に
病気になるほうが悪い？ なんだとこの野郎！ もういい！（電話を切って、
電話帳を引く）三沢眼科、武藤眼科、安田眼科、吉江アイクリニク、畜生、

目医者ばかりではないか。医者はどこだ。

王様王、ぐったりとしている。

従者 陛下、大丈夫でございますか、陛下。
王様王 うつつてはいかん。下がってよいぞ。
従者 寝室へ。お休み下さい、陛下。
王様王 大事な。

従者、王様王に肩を貸しながら寝室へ。
残される王様達と従々者。

従々者 えー、他にご意見は。

沈黙。

従々者 えーと。じゃあ、こちらから順番にお願いします。

王様達、洪々再度意見表明。

買取王 金で解決する。
新人王 流れに任せる。

我慢王 謝る。

従々者 要するに、考えにお変わりない、と。

買取王# そういうこと。

新人王# そ。

我慢王# そうだよ。

従々者 しかし、王様王さまは反対のご様子ですが。

買取王 そんなこといったってなあ。

新人王 こっちから攻めていくって、無理っしょ。無理無理。現実的じゃないって。

我慢王 なんにしてもケンカはよくないし。とりあえず謝って、それですむなら、そ

従々者 れが一番いいじゃないかな。

買取王# それでは結論は。

新人王# 金で解決する。

我慢王# 流れに任せる。

従々者 謝る。

買取王 あの、まとめていただかないと、私も困ります。

従々者 まとめたらくらくれる。

新人王 そういうものでは。

めんどくせー。

従々者
我慢王
従々者

お願いしますよ。
僕はそういうのは。
遠慮なさらずに。

三人の王様、頑なに決めようとしなない。

買取王

くじびきでどうだ。

新人王

いいんじゃない？

我慢王

まあ、どうしてもっていうんだったら、それでも。

従々者

陛下！

買取王

阿弥陀くじでいいな。

新人王

いや、やっぱスピードくじっしょ。

我慢王

僕はガラポンがいいな。

買取王

くじっていえばあみだだろう。

新人王

なんかインチキくせえじゃん。

我慢王

ガラポンなら、インチキの仕様がないと思うんだけど。

買取王

よし、それじゃあ、くじ引きをあみだくじにするか、スピードくじにするか、ガラポンにするか決めるために。阿弥陀くじをしよう。

新人王

だからさ、くじ引きをあみだくじにするか、スピードくじにするか、ガラポンにするか決めるのに、スピードくじをすればいいんじゃない？

我慢王

だから、くじ引きをあみだくじにするか、スピードくじにするか、ガラポンにするか決めるのに。ガラポンをするか、スピードくじにするか、ガラポン

買取王

ガラポンは、機械どうするんだ。ウチの城にはないだろう。阿弥陀なら紙と鉛筆だけでできる。経済的だ。

新人王

阿弥陀はやっぱインチキくさくね？　なんか線足したりしそうじゃん。

我慢王

そうやってスピードくじにこだわるどころが逆に怪しいと思うんだけど。こ

新人王

っそりくじをすり替えたりして。

我慢王

しねーよ、面倒くせー。

買取王

ガラポンは僕が借りてくるからさ。

新人王

時間が勿体ない。タイムイズマネー。

我慢王

じゃあ、阿弥陀かスピードくじならどっちよ。

買取王

うーん、どっちかっていうと、阿弥陀かな。

新人王

そらみる。

従々者

なんでだよ。わっかんねー。

買取王

えーと、陛下？

じゃあ、くじ引きをあみだくじにするか、スピードくじにするか、ガラポンにするか決めるためのくじは。阿弥陀くじに決定！

繰り返される意味のない議論のための議論。

買取王
新人王
我慢王
買取王
新人王
我慢王
買取王
新人王
買取王

じゃあ、一人一本線を足して。
めんどくせー。

一本だけじゃ少ないと思うんだけど。やっぱりこういう場合は二本くらいは。
そんなに書いたら訳が分からなくなるだろう。

じゃあ、間をとって二本でいいじゃん。俺、書かねえけど。

阿弥陀はこういうジャンプする線、OK？

ダメ。

いいっしょ。

じゃあ。こういうコの字型に元の線に戻るやつは？

それもダメ。

なんでよ、いいっしょ。

線があっちに行ったりこっちにいったりして、訳が分からなくなるだろう。
シンプルイズベスト。文句があるか、俺がルールブックだ。

時報（プッププッポーンという音）に合わせてストップモーション。
議論のための議論でいたずらに時間が消費されていく。
そうこうしているうちに地図上の都市に×印が増えていく。
とことん疲れ果てた雰囲気。

従々者

それでは只今より、第128回「朝まで小田原評定・フランスのエスプリ野郎が大砲持つて攻めてきたのでどうしようかを決めるためにあみだくじかスピードくじかガラポンのどれで決めるのかを決めるのにあみだくじにしてみたいもの、一人あたり加えて良い線は1本か2本か3本か、さらにコの字型、ジャンプする線はOKか、選ぶ順番は五十音順で買取王陛下、我慢王陛下、新人王陛下の順か、それともそれもあみだくじで決めるか、っていうか、（以下、適当でも結構です）そもそもイングリッドにあみだくじなんてあるのかよと観客につっこまれた場合、NHKの大河ドラマじゃないんだから時代考証とかガタガタいうなこの野郎と突き放すのか、それともお説ごもつともです。お客様のご意見を最大限尊重しつつ、今後の作品作りに生かして参る所存でございますと企業のように慇懃無礼に答えるのか、またその際の場合表の潰れたダイエーの裏のゴミ捨て場所あたりにするのか、ホテルの宴会場を借りるのか、説明については役者が行うのか、作家がおこなうのか会議を開催いたします。

と、もはや何を決めようとしているのか分からない会議が始まる。

従々者

それでは、前回までの議論を受けまして「あみだくじに追加する線は一人あたり一本、コの字型、ジャンプする線は不可、引く順は五十音順」といことで、反対の方、挙手をお願いします。

全員、消極的賛成。

従々者 他にご意見はございませんでしょうか。なければ、この案で実行致します。

王様達、おざなりな拍手。

従々者 それでは、お願いします。あみだで当たった陛下のご意見を採用いたします。
買取王 金で解決する。

新人王 流れに任せる。
我慢王 謝る。

従々者、あみだくじを回して、線を一本づつ書き加えてもらう。

従々者 それでは。(何か歌いつつ) ジャン！ あたゝり。買取王様です。
買取王 よし、金だ、金で解決しよう。
従々者 と、申しますと？

買取王 欲しいというなら売ってやろう。ただで盗られるぐらいなら、いくらかでも金に換えたほうがマシだ。そうだな、テムズより南の都市を最大三個まで、1都市1億ディナール。3個セットなら特別割増の4億ディナールで交渉してこい。
従々者 かしこまりました。

従々者、交渉に出発して、すぐ戻ってくる。

従々者 失敗いたしました。手を伸ばせばただで拾える石に、1億も2億も払うバカが居るか、と。

買取王 そうだろう、そう言ってくるんじゃないかと思ってた。そこで、よし、金だ、金で解決しよう。パート2だ。

従々者 と申しますと？

買取王 和解金を支払う。

従々者 しかし、その金はどこから。

買取王 じゃんじゃん作らせる。金貨とか銀貨とかでなくていい、紙だ、紙の金を作
つてじゃんじゃん刷って、紫色の風呂敷に包んで向こうに送りつける。

従々者 かしこまりました。

従々者、交渉に出発して、すぐ戻ってくる。

従々者 失敗いたしました。なんだこれはふざけるな、と。

買取王 (しらんぷり)

新人王 ほらみろ！

我慢王　いわなかったんだけど、僕もダメだと思ってたんだよ。
買取王　なんだと。

我慢王　ごめんなさい。(堪忍袋に息を吹き込む)
従々者　申し上げにくいのですが、私も。

買取王　じゃあその時に言えばよかっただろう。
新人王　言ってもどうせ変えねえじゃん。だったら考えるだけ無駄、言うだけ無駄っ
しよ。どうせ無駄なら、余計なエネルギー使わない方が経済的っしよ？

買取王　だからって、流れに任せてどうなる。
新人王　しらねーよ。なるようになんじゃね？

買取王　お前、新人王のくせに、なんだそのやる気のない態度は。
我慢王　それは確かに。

従々者　新人王なのに。
買取王　一番の新人りなんだから、一番働け。

我慢王　それは確かに。
従々者　新人王ですし。

新人王　新人王じゃねえよ、ニート王だ馬鹿！　誰が働くか。ごちやごちや言っつ
と引きこもるぞ、ゴルア。

新人王、我慢王を突き飛ばす。

新人王、また袋に息を吹き込み我慢。

買取王　クソ！　どうする。どうすればいい。金でダメだら、今度は脅しだ。貿易を

我慢王　全面停止すると伝える。

買取王　でも、それじゃあ。

従々者　五月蠅い、黙れ。
かしこまりました。陛下。

従々者、交渉に出発して、すぐ戻ってくる。

従々者　失敗いたしました。やるならやってみろ。困るのはどっちの方だと。

(しらんぷり)

新人王　ほらみろ！　余計悪くなってんじゃねえか。

我慢王　だから言おうとしてたのに。

買取王　だったらその時言え。

我慢王　言えって、黙れっていったのはそっちじゃないか。

買取王　それでも言えばいいだろう。

我慢王、いつもの袋に息を吹き込むが、文字通り堪忍袋の緒が切れて、
中身が吹き出す。

我慢王、人が変わったように激怒。

我慢王

黙って聞いてりやこの野郎！ いったもいっつもそっちの都合ばかり押しつけやがって。こっちの意見は無視か？ 世界標準はお前のための標準で、国際基準も、お前のための基準だろ。なんでいちいちこっちがお前に合わせなきゃなんないんだ。お前が俺に合わせる。箸使え。畳で暮らせ。スキ一の長さは元に戻せ。お前が勝つようにルールを変えて、それでも負けてりや世話ねえや。てめえのケンカに毎度毎度つきあわせやがって。もう金も人もださねえから勝手にやってくれ。クジラ食わせろ。イルカは皆殺しだ。ウサギ食うやつが可哀相とか言うな。ガタガタいうなら核持つぞ。しまいにやぶっ放すぞ。(以下、罵詈雑言)

我慢王、新人王、買取王三つどもえの罵りあい。

そうこうしている間にも、地図上の×印はどんどん増えていく。

と、そこに王様王と従者が戻ってくる。

王様王

静まれ！！ いったい何をやっておるのか！！

落雷。

叩き付けるような雨音。

音楽。

王様王

戦況はどうだ。どうなっているのだ、ヒューバート？

従者

あまりよくないようです。陛下のご気分は？

王様王

長い間わずらっていた熱病が、ますます重くなってきました。ああ、この胸が、

従者

苦しい！

従者

フィリップ2世は、ボーンマス、ブリストル、バース、ドーバー、カンタベ

王様王

リー、クロイドンの各都市ならびに周辺地域の領有権を主張すると。

従者

要するに、テムズより南を全てよこせということか。

王様王

それから、川を。テムズの治水権を要求しています。

従者

なんだと。…テムズがなければロンドンどころか、この国は維持できぬ。土地があつても水がなければ、砂漠の領土を持っているのとさして変わらぬ。

王様王

遠回したが、全てを要求しているのと同じではないか。

従者

さようでございます、陛下。敵軍はドーバーを越え、ここロンドンへ向かつて進軍中。我らが居城は包囲されつつあります。

買取王

ドーバー要塞陥落。守備隊長ペンティアム公、戦死。

新人王

カンタベリーが襲撃されました。第6騎士団壊滅。騎士団長セレロン公、消息不明。

王様王

テムズの橋を落とせ。籠城だ。

新人王

ブライトンが降伏。アーマード伯は投降したもよう。

王様王

リスクの重装騎兵隊はどうした。

新人王

リスクの重装騎兵隊はどうした。

王様王

リスクの重装騎兵隊はどうした。

従者

クロイドンで敵軍と交戦中です。

王様王

内壁の城門を閉じろ。弓矢隊は南門内壁に配置。

我慢王

敵軍、クロイドンを突破。リスク公、消息不明。

買取王

敵軍、テムズ南岸に集結、第5騎士団と衝突。

新人王

第5騎士団、アスロン公が陣頭指揮を取ります。

我慢王

形勢、我が方に不利。押されています。前線を維持できません。

王様王

援軍を出せ。

新人王

駄目です、間に合いません。

我慢王

防衛線を突破されました。アスロン公、消息不明。

従者

あもう。そろそろ失礼してもよろしいでしょうか。家には十を頭に7人の

従者

子が：

従者

(胸ぐらを掴んで) 馬鹿者！！最後まで陛下にお仕えせぬか。

従者

しかし、私が子供達を守らねば、誰が守ってくれましょう。お願い致します。

王様王

この通りです。なにとぞ、なにとぞ、お許しを。

王様王

下がってよいぞ。

従者

陛下！！私は陛下をお守りするためならば、この身を盾にいたしましょう。

王様王

それなのに、この男は無理を言うな、ヒューバート。(従者) 玉座の裏に、いざという時のため

従者

の地下通路への入り口がある。町はずれの水車小屋と、それから北の森の中

王様王

まで繋がっておる。私も私の大切なものを守るために戦おう。お前も、お前

従者

の大切なものを守るために逃げるがよい。

従者

ありがとうございます。

ひとつだけ、頼みがある。

王様王、従者)に耳打ち。

従者

かしこまりました、陛下。ご武運をお祈りします。お世話になりました。

従者、王様王と従者に頭を下げ、その場を去る。

王様王

ヒューバート。

従者

はい、陛下。

王様王

・・・北門を開け。市民を避難させろ。

従者

・・・すでに城下には市民の姿はなく。皆、我先にと脱出した様子。

王様王

そうか。・・・それならよい。

従者

陛下？

王様王

構わん。彼らは王ではないのだ。矜持はなくとも、春に蒔く籾とそれを耕す

従者

鍬さえあれば、誰の下でも生きていけよう。さあ、・・・剣を。

陛下。

王様王

随分と無理をしてきた。ヒューバート、私はな、元々、王の器ではないのだ。そんな事は私自身が一番よく分かっておる。それでもこの世この身に生まれついてしまったのだ。その宿命を受け入れるしかあるまい。本当はな、花を育て、花を愛で、暮らしてみたかった。お前のように、自由に暮らしてみたかった。だが、私の手の中にあるのは、いつも血塗られた剣だけだ。だから、戦い続けよう。まだ見ぬ夢の日のために。さあ、剣を。…お前ももう下がれ。今まで、本当にご苦労だった。

新人王

敵軍、外壁を突破。

買取王

南門から火の手が上がりました。

我慢王

敵兵が城門に殺到してきます。

従者、王様王の元に剣と鍬を持ってくる。

地響き。

時が、一斉に震えはじめる。

新人王

敵軍、城門を突破！！

王様王、その右手に剣、左手に鍬を持ち、ただ逡巡する。

従者

お選び下さい、陛下。私には・・・申し上げたいことはたくさんありますが、あなたには何も申し上げられません。ピクニックにいきましょう。あなたが王様でなくても、私は構わない。構わないんです。へたくそですが、サンドイッチもつくりませう。陛下の好きなチーズとハムもたくさん入れて。私の田舎なら、今ならくしゃみやがとまらなくなるぐらい花が咲いています。どこにでも咲いているような花ですが、それでも私が一番好きな花です。だからこそ、私が一番好きな花です。薔薇の誇りも、水仙の孤独さもなく、ただやたらに咲くしか能がない、やかましくさわがしい花ですが、きつと陛下のお気に召すかと思えます。水もいつでもお持ちします。何も無い村ですが、花と水だけはやたらある、呑気で静かで平和な村です。あなたと私、二人静かに暮らすなら、なんの不足も無い村です。ですから。

・・・お逃げ下さい、陛下！！

王様王、逡巡する。

おそらくはすべての「決断者」がそうであるように。

激しい激突音。

城門が砕け散る音。

関の声をあげ、突入する敵兵。

音楽。

王様王、静かに頷き、その言葉に微笑みかえす。

そして、振り下ろされたのは・・・右手。
落葉。

斬りつけられ、倒れ伏す従者。

その姿を、不審の表情で見つめる王様王。

自らの手元の血塗られた剣に気付く。

王様王の手から、剣が落ちる。

とめどなく振り続ける落葉の中、かつて従者がそうしたように、王様王は従者を元に戻そうとする。

王様王、従者を壁に立てかけたり、椅子に座らせたりと無理矢理に立ち上がらせようとする。

しかし力の抜けたそれは、どうしても元通りにならない。

落葉はいつしか、雪に変わる。

王様王を取り囲む人影。

それはいつか見た冬の日の風景のように。

(シーン3終了)

4 冬

三日月の、弱々しい月明かり
冬の冷たい空気があたりを包んでいる
それは、凡庸な冬の夜の風景である
王をやや遠巻きに取り囲む、3人の人影

人々 (大きく)・・・何を？。

王様王、従者の亡骸に、静かに布をかぶせる。

人 1 墓・・・ですか？

静かに時間が流れる。

人 2 墓でしょう。

僅かに風が吹いたような気がする。

人 3 お悔やみを。

王様王、取り囲む人影を強く睨みかえす。

王様王

悔やみはせぬ。・・・春、夏、そして冬。春、夏、そして冬。その冬の凍てついた大地の下も、春には芽吹くだろう種が静かに眠り、焼き払われたはずの枯野にも、静かに若葉が芽生えるように、この冬の夜の帳は、春には明けることを約束された、つかの間の眠りに過ぎぬ。

種を蒔こう。そしてもう一度秋を迎えよう。暖かくならぬ春を、夏の長雨を、秋のつむじ風を憂いながら、ただひたすらに、祈るように秋を待とう。

暑い夏には麦もいだろう。手間はかかるが米もいい。心配ならば豆も植えよう。腹を満たすなら芋もいい。やがてくる秋の実りのために、今はこの凍てついた大地と戦おう。

・・・まずは、吊いの鐘を。そして・・・

従々者

陛下！！

丘の上に設置された大砲の傍らに従々者。

その手に種火を携え、刺客達を睨み据える。

怯む刺客達。

王様王、その姿を目にし、少し微笑んだように見える。

従々者

波瀾万丈の人生劇場、第45章。「王様と私と秘密の約束」。陛下、いつになるかはわかりませんが、いつかまた、お会いしましょう。私の人生劇場の最終章まで、地を耕し、実りを蓄えながらお待ちしております。それでは、お元気で。陛下。

従々者、火種を砲身に投げ込む。

発泡！

しかしそれは地上へとは向かわず、夜空に大輪の花を咲かせる。

一同、一瞬だけ、その夜空に咲いた大輪の花に目を奪われる。

王様王

・・・まずは、吊いの鐘を。そして・・・花を。

刺客、関の声を上げ、王様王に斬りかかる。

音楽。

つむじ風に舞い上がる落ち葉。

王様王、ひたすらに大地に鍬を振り下ろす。

斬りかかる人々を、ただひたすらにその手の鍬ではじき返しながら。

その剣と鍬のぶつかり合う音は、鳴り響く吊いの鐘のように。

その繰り返しの中、実りの秋を信じる力強さに満ちて。

やがて大地から芽吹くかのように、ゆっくりと腕が伸びてくる。

その腕は、紛れもなく：

(幕)

脚本執筆に際し、以下の文献を参考にしました。

「ジョン王」 ウイリアム・シェークスピア 小田島雄司・訳 白水社刊